

大豆新品種フクメジロの育成について

山木鉄司・古厩留男・石塚隆男

I 緒言

石岡試験地の育成系統、大豆関東26号は、昭和27年、富山県で、ついで、昭和30年、岩手県においてそれぞれ奨励品種に編入されて、昭和33年2月に新品種として、大豆農林15号に登録、フクメジロと命名された。ここに本品種の育成経過、特性概要、および適応地帯についてその概要を報告し、参考に供したい。

なお、本品種の地方的適否および特性検定に御協力下された関係都県農業試験場の担当官各位に深謝の意を表す。

II 来歴

フクメジロは、茨城県農業試験場石岡試験地における農林省指定大豆育種試験において、昭和15年、花嫁茨城1号を母とし、鼠莢を父として人工交配を行ない、以後選抜固定をつづけ、昭和22年2月、大豆関東10号の系統名にて地方的適否を検討するため、富山県農業試験場にその種子を配布したものであるが、当時の、関東10号はまだ多少の分離が認められ、この配布種子は其後選抜固定を重ねられた関東10号と異なつたものとなつた。以後この系統は富山県農業試験場で保存され、ふたたび、昭和30年に石岡試験地にとりよせ選抜固定をはかり、昭和32年よりあらたに、大豆関東26号として地方的適否の検討を重ねたうえ、昭和33年2月、フクメジロと命名された。

なお、本品種育成に直接従事した職員氏名と担当期間

第1表 育成従事者一覧

氏名	担当期間
若土清隆	昭和15年～昭和19年
小林政明	昭和15年～昭和17年
小河原進	昭和20年～昭和22年
有賀武典	昭和17年～昭和22年
中村迎	昭和22年～昭和26年
山木鉄司	昭和26年～現在
古厩留男	昭和22年～現在
石塚隆男	昭和23年～現在

はつぎのとおりである。

III 育種目標

本組合せを企画した、昭和15年頃の関東中間部地帯は、9月中旬までに成熟する早、中生種、すなわち花嫁生娘、鬼裸、借金なし、十石、その他の在来種が多く作付されていた。これは一般に生産力が安定しているが、例年成熟期が雨期にあたる関係上、紫斑病、雨害粒の発生が多く粒質の悪変がはなはだしかった。なお、この地帯では、極早生および中晩生種では、シロイチモンチマグラメイガおよびマメシクイガの被害がはなはだしくまた、晩生種では、サヤタバエの加害が多く、これらの品種の導入は一般に不可能であつた。

このような観点から、中生種で多収、良質なものを得る目的でこの組合せが考えられた。まづ母親に選んだ、花嫁茨城1号は、熟期は中生の中に属し、白臍、中大粒良質で、紫斑病その他の粒の悪変は少ないが、徒長蔓化しやすく、生産力も低く、また栽培環境が悪いと稔実不良になり易い欠点があり、父親の鼠莢は、熟期は中生の晩に属し、臍色は淡褐の中粒種で、多莢、多収性であるが紫斑病にきわめて弱い欠点がある。このような両親から中生種で安定した多収性と、それに紫斑病、雨害粒の発生が少ない品種の育成が企図されたものである。両親の特性表は、第2表に示すとおりである。

第2表 両親品種特性表

品種名	開花期	成熟期	生育日数	花色	莖長	分枝数	一株莢数	草型
(母)花嫁茨城1号	月 日 7.28	月 日 9.15	日 107	白	cm 38	4.9	65	D
(父)鼠莢	7.29	9.19	111	莢	47	5.1	106	A ₂

品種名	莢色	毛茸色	毛茸多少	百粒重	粒色	粒形	光沢	臍色	紫斑病多少
(母)花嫁茨城1号	褐	白	極少	g 14.3	黄白	稍球	△	白	少
(父)鼠莢	暗褐	白	多	12.7	黄	球	ビ	淡褐	中

註：昭和18年度 石岡試験地成績

IV 育成経過

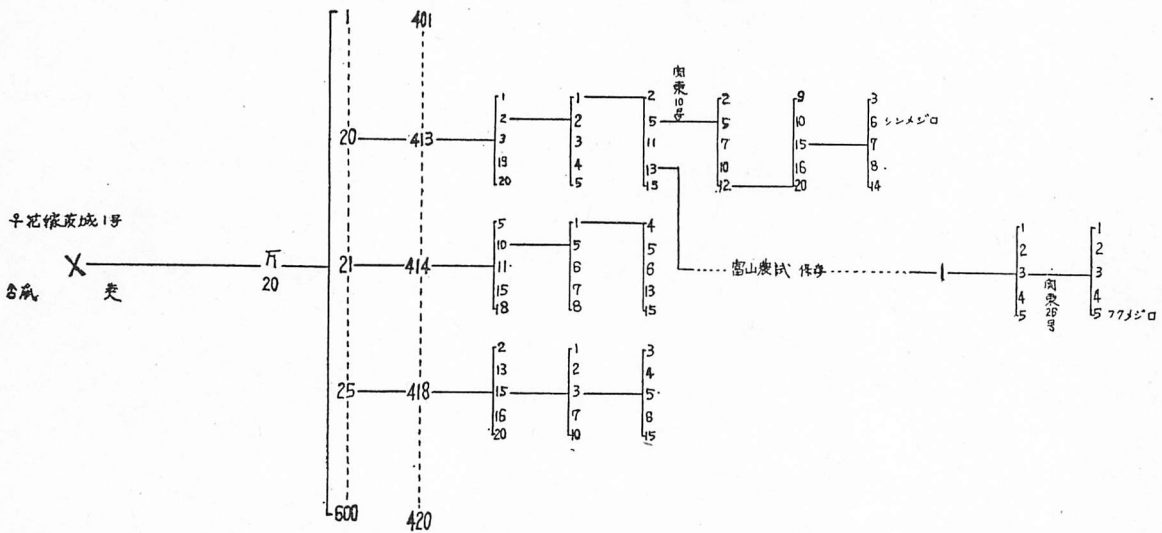
育成経過は、第3表、第1図に示すとおりである。

第3表 育成経過一覽表

年次	世代	供試			選抜			試験場所
		系統群数	系統数	個体数	系統群数	系統数	個体数	
昭和15年	交配						20	茨城農試石岡試験地
" 16年	F ₁			20			20	"
" 17年	F ₂			600			20	"
" 18年	F ₃		20			3	15	"
" 19年	F ₄	3	15		3	3	15	"
" 20年	F ₅	3	15		3	3	15	"
" 21年	F ₆	3	15		1	1	5	"
" 22年	F ₇	1	5		1	1	5	"
" 30年	F ₁₅	2	1				5	"
" 31年	F ₁₆	1	5		1	1	5	"

第1図 フクメジロの育成経過図

年次	昭15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	30	31	32
世代	P ₀	F ₁	F ₂	F ₃	F ₄	F ₅	F ₆	F ₇	F ₈	F ₉	F ₁₅	F ₁₆	F ₁₇

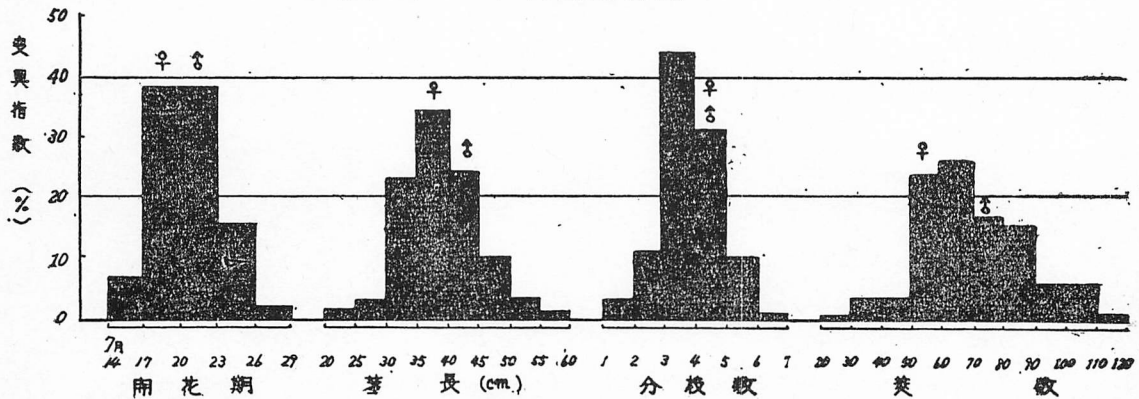


交配は、昭和15年に茨城県農業試験場石岡試験地において実施した。

F₁は、昭和16年に20ヶ体を養成したが、全個体が交雑確実であつて、1201粒採種した。

F₂は、昭和17年に1株1本立として600個体栽植した。生育はほぼ正常であつた。各形質の分散については第2図に示すとおりである。

第2図 F₂ 個体変異表



開花期は両親の差は約3日であるが、全体の変異の中は約2週間あり、両親より早い個体は7%、遅い個体は17%であった。茎長および分枝数も、両親間の差はわづかであるが変異の中はいづれも大きく、このうち両親に優るものは約12%であった。一株莢数は、両親間の差はやや大きい、全体の変異の中はさらにきわめて大きく、このうち多莢性で父親に優るものが約30%あり母親より劣るものは比較的少なかった。

このような集団の中より、両親より長茎、多枝、多莢で、徒長性の少ないものを目標に選抜を行なつたが、圃場において観察で第1次選抜を実施し、成熟期が、鼠莢程度のもの20ケ体、それより5日位晩生な個体13ケ体を選抜し、室内における第2次選抜は、茎長、分枝数、莢数と品質（とくに紫斑病）について調査し、最終的に中生13ケ体、晩生7ケ体をえらび次期の育成材料とした。

F₃は、昭和18年に20系統を栽植した。生育はやや徒長ぎみで全般に、ヒメコガネの被害が多く着莢はやや不良であったが、その他の形質に優るところが多かつた。なお、系統内の固定度はほとんどの系統が、花色、毛茸の多少等に分離が認められ、開花期、成熟期等においてもやや未固定のように思われた。これらの系統より熟期が父親程度で、着莢性高く捻実良好で、紫斑病に強く、かつ分離の甚しくない、20-413と、21-414の2系統と、それよりやや晩生な25-418、1系統を選抜し、1系統当り5ケ体を次代の育成材料とした。

F₄は、昭和19年において3系統群、15系統が供用された。各系統とも、着莢性はやや少ないが捻実良好のものが多く多収性であった。固定度については、開花期、成熟期はどの系統も系統内で分離を示さなかつたが花色では、21-414と25-418の2系統群、10系統が系統内で紫と白に分離し、20-413の系統群、5系統は、いづれも紫であった。選抜は各系統群より、茎が高く、草型はA₂型で、多莢性および捻実の良好な紫斑病の少ないものをそれぞれ1系統選抜し、さらに1系統当り5ケ体を選んで次代の材料とした。

F₅は、昭和20年に3系統群、15系統を供用した。成熟期は各系統群のいづれも群内の系統間ではほとんど分離が認められなかつたが、前年度分離のみられた花色は、21-414-10および25-418-15の2系統群では紫色で固定し、20-413-2の系統群は、そのうちの3系統のみに分離があり、ほかの2系統については、白と紫のそれぞれで固定していた。選抜は、各系統群よりF₄と同じ選抜目標でそれぞれ1系統を選び、さらに1系統当り5ケ体を選んで次代育成材料とした。なお、本年から

2-413-2と、25-418-15の2系統が生産力検定試験に供試されたが、20-413-2の系統は多収性で、農林2号、達摩2号、奥羽13号等より優り有望と認められ、25-418-15の系統はいづれの品種よりも劣つた。

F₆は、昭和21年において前年と同じく3系統群、15系統を供用したが、21-414-10-5と、25-418-15-3の系統群は本年も多収性において、20-413-2-1の系統群より劣り見込がないと考えられたので棄却した。選抜された20-413-2-1の系統群は、本年も花色において白色1系統、白と紫の混合4系統との分離が認められたが、いづれも草型はA₂型で、長茎、多莢、かつ良質で、本年の生産力検定試験においても多収性を示しとくに悪い形質もないので、関東10号の地方番号をつけ、次年度から関係県に種子を配布して地方的適否の検討を開始した。しかし、採種種子が少なかったため、この系統群の選抜残の種子をもあわせて利用したため、富山県にたまたま白花の系統の選抜残が配布され、以後、同県で保存されて、フクメジロとなつたものである。

F₁₅は、昭和30年であるが、ふたたびその種子を石岡試験地にとりよせ集団栽培したところ、花色は白色で開花期、成熟期等も個体間に差がなく、この集団より長茎、多枝、多莢で多収性と思われる良質な個体を5ケ体選り次代の育成材料とした。なお、別途に生産力検定試験に供用して一般特性および生産力を検討したところ、開花期、成熟期では、シンメジロより3~4日早かつたが、その他の形質および生産力はほとんど、シンメジロと差異が認められなかつた。

F₁₆、昭和31年においては前年選抜した5ケ体を5系統にして、各種形質について固定度を検討したが、系統間には差異はなく、その中より前年と同じような選抜目標によつて1系統、5ケ体をえらび次代育成材料とした。なお、同時に行つた生産力検定試験においてもシンメジロに劣らぬ多収性を示し、しかも紫斑耐病性でこれに優り、3~4日早熟であるため新しく、関東26号の地方番号をつけ、次年度より地方的適否を検討することとした。

F₁₇は、昭和32年であつて、前年度の選抜5系統について再度固定度を調査したところ各形質ともまつたく差異が認められず固定していることを確認したため、育成を終了し、次年度から原々種保存栽培に移した。

V 一般特性の概要

フクメジロの一般特性は、第4表および第5表に示すとおりである。

第4表

品種名

フクメジロ

シンメジロ

農林2号

第5表

品種名

フクメジロ
シンメジロ
農林2号

すなわち農林5号であつて生育は毛茸が呈するの少ない

VI

各地におり紫斑病標である育成鼠莢お株枯る。銹病部類

第4表 生育調査成績

品種名	試験年次	開花期		成熟期	生育日数	茎長 cm	分枝数	主茎節数	一株莢数	倒伏
		月日	月日							
フクメジロ	昭31	7.23	9.22	114	56	6.6	16.3	74	中多中	
	32	7.23	9.21	113	77	7.3	18.5	92		
	33	7.20	9.19	127	93	5.8	19.0	83		
	34	7.26	9.24	111	67	6.4	15.5	60		
	平均	7.23	9.22	116	73	6.5	17.3	77		
シンメジロ	昭31	7.25	9.24	116	50	6.3	16.4	74	中多中	
	32	7.27	9.25	117	75	6.8	19.3	92		
	33	7.21	9.25	129	87	5.9	19.0	79		
	34	7.28	9.28	115	66	6.3	15.7	64		
	平均	7.25	9.26	119	70	6.3	17.6	77		
農林2号	昭31	7.21	9.21	113	37	5.2	13.7	58	少中ム	
	32	7.25	9.21	113	61	5.3	17.3	97		
	33	7.19	9.20	124	75	4.7	18.2	75		
	34	7.26	9.21	108	52	5.4	14.4	71		
	平均	2.23	9.21	115	56	5.2	14.7	75		

第5表 特性調査成績

品種名	草型	花色	毛茸多少	毛茸色	莢色	粒の大小	粒形	粒色	光沢	臍色
フクメジロ	A ₂	白	多	白	暗褐	中大	稍扁球	黄白	無	白
シンメジロ	A ₂	重	多	白	暗褐	中大	稍扁球	黄白	無	白
農林2号	A ₂	白	多	褐	暗褐	中大	球	黄	強	黒

すなわち、熟期は農林2号とほぼ等しく、農林4号と農林5号の間で、シンメジロより3~4日早い中生種であつて、いつれの形質もシンメジロときわめて酷似し生育は旺盛で、多枝、多莢型である。植物体には白色の毛茸が密生し、莢は暗褐色であるが熟するとねずみ色を呈する。子実はやや扁球にして、中の大粒、種皮は光沢のない黄白色で、かつ白臍である。

VI 特性検定試験成績

各地における特性検定試験の成績の一覧は、第6表のとおりである。

紫斑耐病性品種の育成は、この組合せの一つの育種目標であつたが、多収で花嫁茨城1号程度の耐病性のものは育成できなかつた。しかし、その耐病性は中位に属し鼠莢およびシンメジロよりも優つた。

株枯病には弱い方であるが、黒痘病には抵抗性である。銹病に対しては、1ヶ年の成績であるが発病の少ない部類に属している。

第6表 特性検定試験成績一覧表

品種名	紫斑病	株枯病	黒痘病				銹病	シンクイ虫類
			昭28	7月29日調査	8月30日調査	9月30日調査		
フクメジロ	23.5%	21.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	少	41.6%
シンメジロ	33.5%	17.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	多	41.1%
農林2号	6.7%	12.4%	89.6%	68.8%	92.4%	79.0%		55.3%

註：紫斑病-昭32 石岡試験地成績 発病粒数歩合
株枯病-昭32 石岡試験地成績 発病株歩合
黒痘病-岩手農試成績 罹病株歩合
銹病-昭32 愛媛農試久万分場成績
シンクイ虫類-昭33 石岡試験地成績 被害莢歩合

つぎに、関東地方で近年とくに被害の多い、シロイチモジマグラメイガおよびマメシンクイガにたいする耐虫性については、もつとも弱いとみなされる農林2号よりは、やや強い程度である。

VII 子実収量

育成地における収量調査成績を示すと、第7表のとおりである。

第7表 収量調査成績

品種名	試験年次	標準栽培		多肥栽培		
		アール当子実重	同左比率	アール当子実重	同左比率	多肥増収率
フクメジロ	昭31	14.5 kg	107%	-	-	-
	32	20.4	99	23.2	88	114
	33	20.0	100	20.2	95	104
	34	25.6	100	-	-	-
	平均	20.1	101	21.7	91	108
シンメジロ	昭31	13.5	100	-	-	-
	32	20.6	100	26.3	100	128
	33	20.0	100	21.2	100	106
	34	25.6	100	-	-	-
	平均	19.9	100	23.8	100	120
農林2号	昭31	12.4	92	-	-	-
	32	15.9*	77	21.7	83	136
	33	1.72**	86	20.5	97	119
	34	17.9*	70	-	-	-
	平均	15.9	80	21.1	89	133

註：昭31.32は4反覆、昭33.34は6反覆のいずれも乱塊法による試験成績*のあるものは5%水準でフクメジロに対し有意差があり、印のないものは有意差認められない。

まず、標準栽培による4ケ年の成績では、いづれの年も、シンメジロに比較し有意差が認められずきわめて多収性であり、関東地方中間部の主要品種である農林2号よりは明らかに多収で、3ケ年にわたり5%水準で有意差が認められた。

しかし、多肥栽培においては、2カ年の成績からみてシンメジロに対し、傾向としてはやや劣り、また、多肥適応性もやや小さいように考えられる。とくに主茎型の農林2号と比較するとその増収率は明らかに劣るようである。

Ⅷ 品 質

育成地における子実についての調査成績は、第8表のとおりである。

第8表 品質調査成績

品 種 名	試験年次	百 粒 重	品 質	紫斑病
フクメジロ	昭 31	22.0g	中上	ビ
	32	21.4	中中	少中
	33	22.4	中上	ビ
	34	26.0	中上	少
	平均	23.0		
シンメジロ	昭 31	22.3	中中	少
	32	20.8	中上	少少
	33	23.9	中下	中少
	34	25.7	中上	少
	平均	23.2		
農林2号	昭 31	20.4	中中	少
	32	19.2	中中	少少
	33	20.2	中上	ビ
	34	19.0	上下	ビ
	平均	19.7		

第10表 試作成績一覽表

試作地名	栽培条件	品 種 名	開花期	成熟期	茎長	アール当子実重	同左比率	品質	紫斑病	試験年
			月日	月日	cm	kg	%			
岩手本場	標準	フクメジロ	8.5	10.8	82	17.9	88	上中		昭 29~30 4ケ年平均
		農林4号	8.10	10.18	79	20.4	100	中中		
岩手胆江分場	標準	フクメジロ	8.5	10.13	80	26.9	107	中上		昭 29~30 5ケ年平均
		農林4号	8.8	10.25	75	25.1	100	中中		
岩手九戸分場	標準	フクメジロ	8.5	10.18	83	22.2	90	中上		昭 30~31 2ケ年平均
		農林4号	8.10	10.19	78	24.8	100	中中		
岩手南部試験地	標準	フクメジロ	8.19	10.3	43	16.8	175	上		昭30
		農林4号	8.16	9.28	41	9.6	100	中		
岩手高冷地試験地	標準	フクメジロ	8.7	10.18	75	15.9	112	上		昭30
		十勝長葉	7.23	10.8	45	13.2	100	中		

百粒重は、シンメジロとほとんど同じで、農林2号よりはやや大きく、紫斑病は、シンメジロよりやや少品質は優るようである。なお、白臍大粒であるため、価値が高く、岩手県では、白臍良質種として奨励品採用している。しかし、関東地方においては、年に成熟期に雨害をこうむり、紫斑粒および、雨害粒がし、やや品質を悪化するおそれがあるので収穫時期くらしえないことが大切である。裂皮を生じやすい欠点がある。

種皮歩合および、子実の蛋白含量については、第9表のとおりである。

第9表 子実の分析結果

品 種 名	種皮歩合*	蛋白質(乾物中)
フクメジロ	6.8%	36.0
シンメジロ	6.5	36.8
農林2号	7.6	39.0

註：*印は昭34 食糧研究所分析成績

**印は昭33 石岡試験地分析成績

すなわち種皮歩合は、農林2号に比較して、フクメジロ、シンメジロのいづれもきわめて低く皮のうすいを示しているが、蛋白質含量は中位であつて蛋白質含量高い農林2号にくらべ低い。

Ⅸ 適 応 地 帯

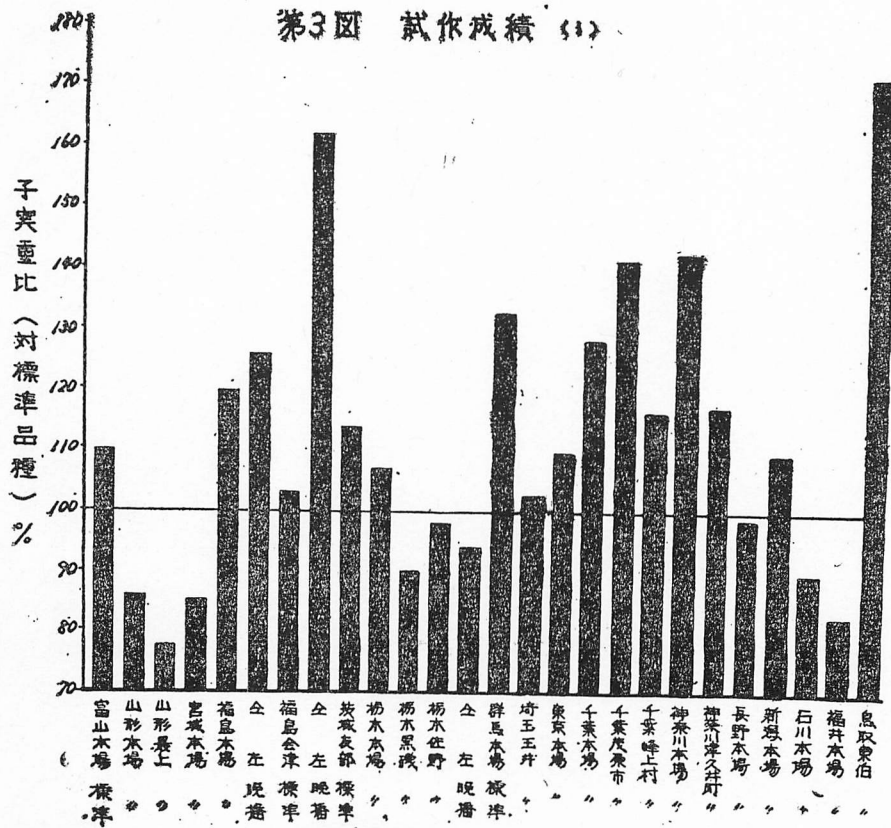
フクメジロの各県における試作成績を一括すると、10表および第3、4図のとおりである。

山木・古厩・石塚：大豆新品種「フクメジロ」の育成について

岩手胆沢村	標準	フクメジロ 農林4号	8.6 8.9	10.8 10.14	66 62	18.0 17.3	104 100	上下 中	中少 中中	昭 30~32 3ヶ年平均
	多肥	フクメジロ 農林4号	8.7 8.11	10.11 10.17	68 64	20.7 20.7	100 100	上下 中中	中少 中中	昭 30~32 3ヶ年平均
岩手盤清水村	標準	フクメジロ 農林4号	8.7 8.10	10.16 10.16	67 58	20.2 19.4	104 100	中上 中中	少 多少	昭 30~32 3ヶ年平均
	晩播	フクメジロ 豊林4号	8.13 8.11	10.19 10.19	64 52	18.1 16.8	108 100	中上 中上	ビ 中多	昭 30~32 3ヶ年平均
岩手滝沢村	標準	フクメジロ 農林4号	8.6 8.8	10.1 10.7	67 63	17.1 16.6	103 100	上下 中中	中多 中中	昭 30~32 3ヶ年平均
岩手遠野市	標準	フクメジロ 農林4号	8.8 8.8	10.14 10.13	73 64	23.3 24.0	97 100	上下 中中	少中 中多	昭 30~32 3ヶ年平均
岩手岩泉町	標準	フクメジロ 農林4号	8.16 8.16	10.18 10.16	68 57	16.7 16.6	101 100	中中 中中	ビ 少	昭 30~32 3ヶ年平均
岩手種市町	標準	フクメジロ 農林4号	8.16 8.14	10.10 10.15	67 73	18.2 15.3	119 100	中上 中上	少 中	昭 30~32 3ヶ年平均
岩手福岡町	標準	フクメジロ 農林4号	8.8 8.8	10.13 10.11	102 99	22.7 27.0	84 100	中下 中上	中少 少	昭 30~32 3ヶ年平均
富山本場	標準	フクメジロ 陸羽4号	7.22 7.22	9.20 9.19	55 50	22.2 20.1	110 100	中上 中下		昭 22~25 4ヶ年平均
山形本場	標準	フクメジロ 奥羽13号	8.4 8.2	10.6 10.6	57 81	25.7 29.8	86 100	中上 上下	ビ	昭 32. 33 2ヶ年平均
山形最上分場	標準	フクメジロ 秋田兄	8.4 8.1	10.3 9.29	77 71	14.7 18.9	78 100	中中 中上		昭32
宮城本場	標準	フクメジロ ウゴダイズ	8.5 8.7	10.8 10.8	82 97	18.3 21.4	85 100	上下 上中	ビ ビ	昭32
福島本場	標準	フクメジロ 達摩2号	8.1 8.2	10.9 10.8	52 56	20.9 17.4	120 100	中上 中上	ビ ビ	昭 32. 34 2ヶ年平均
	晩播	フクメジロ 達摩2号	8.7 8.8	10.10 10.9	53 43	17.9 14.2	126 100	中中 中中		昭34
福島会津支場	標準	フクメジロ 達摩2号	8.1 7.30	9.25 9.29	59 56	20.3 19.8	103 100	上 中下		昭34
	晩播	フクメジロ 達摩2号	8.9 8.11	10.9 10.7	61 46	23.2 14.3	162 100			昭34
茨城友部	標準	フクメジロ 農林2号	7.19 7.20	9.19 9.20	78 66	25.7 22.5	114 100	中中 中上	中 ビ	昭 33. 34 2ヶ年平均
栃木本場	標準	フクメジロ 農林2号	7.24 7.23	9.21 9.21	79 68	25.6 23.9	107 100	中上 上下	少 ビ	昭 32~34 3ヶ年平均
栃木黒磯分場	標準	フクメジロ 農林2号	7.26 7.26	10.7 10.10	77 79	18.3 20.2	90 100	下上 中中		昭34
栃木佐野分場	標準	フクメジロ 農林2号	7.23 7.21	9.27 9.23	77 64	18.7 18.5	98 100	中上 上下	中少 中少	昭 32. 33 2ヶ年平均
	晩播	フクメジロ 農林2号	8.3 8.1	10.1 9.27	69 57	16.6 17.7	94 100	上 中	少 少	昭32
群馬本場	標準	フクメジロ 農林3号	7.26 7.29	9.24 9.26	52 56	17.0 13.3	133 100	中上 中上	ム ム	昭 32~34 3ヶ年平均

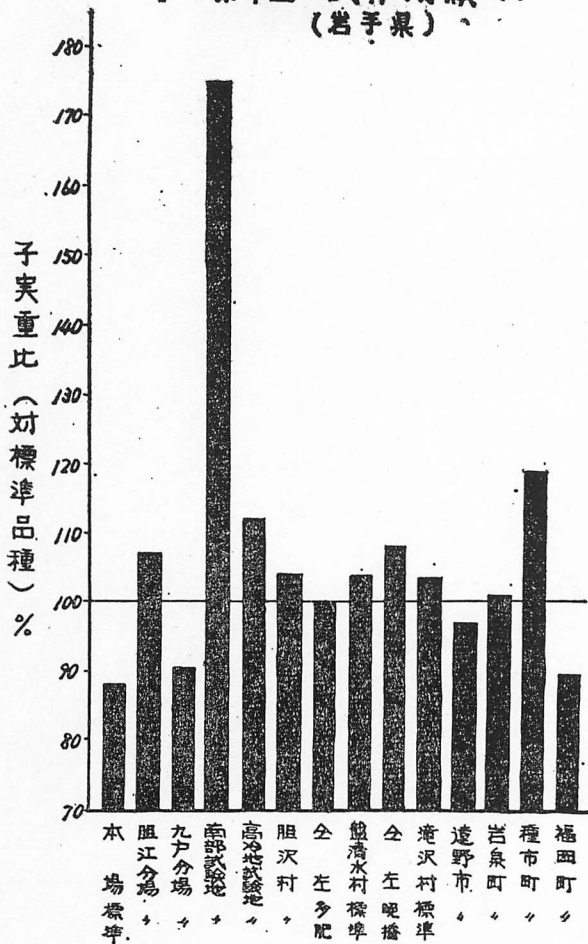
埼玉玉井支場	標準	フクメジロ 農林2号	7.22 7.20	10.1 9.27	— —	16.7 16.1	103 100	中上 中上	中 中	昭3
東京本場	標準	フクメジロ 平井1号	7.19 7.23	9.25 10.9	— —	13.6 12.4	110 100	下上 中下	中多 ビ	昭2
千葉本場	標準	フクメジロ 生娘77号	7.19 7.15	9.19 9.9	53 37	34.1 26.4	129 100	中上 下	少 中	昭3
千葉茂原市	標準	フクメジロ 生娘77号	7.21 7.18	9.23 9.11	72 61	42.6 30.2	142 100	上 上	ム ム	昭3
千葉峰上村	標準	フクメジロ 生娘77号	7.25 7.19	9.28 9.10	52 39	21.9 18.8	117 100	上 中	中 少中	昭3
神奈川本場	標準	フクメジロ 刈羽滝谷	7.20 7.19	9.23 9.15	74 67	28.5 19.9	143 100	中上 上下	少 少	昭3
神奈川津久井町	標準	フクメジロ 刈羽滝谷	8.10 8.10	— —	44 47	18.4 15.6	118 100		ビ ビ	昭3
長野本場	標準	フクメジロ 兄	7.27 7.30	9.30 10.11	82 99	35.1 35.6	99 100	中 中中	少 ビ	昭2
新潟本場	標準	フクメジロ あぜみのり	7.20 7.20	9.20 10.1	77 68	21.2 19.1	110 100	中上 中上	少 中	昭3
石川本場	標準	フクメジロ 大館1号	7.25 7.23	9.28 9.16	65 60	17.7 19.6	90 100	中下 中下	ビ 中	昭3
福井本場	標準	フクメジロ 借金なし	7.21 7.17	9.23 9.19	56 56	28.0 33.7	83 100	中 中	ム ビ	昭2
鳥取東伯分場	標源	フクメジロ 農林2号	7.29 7.29	9.25 9.22	44 33	23.3 13.5	172 100	中 中上	少 ビ	昭3

第3図 試作成績 (%)



まず東北地方にお
 励品種に採用した岩
 近年市場で要望され
 良質であることを第
 収量性においても、
 比較し全般的にやや
 に県南の温暖地で多
 するので販売用品種
 奨励されている。そ
 では試験年数は少な
 本場および会津支場
 同熟期の達摩2号に
 収、かつ良質であり、
 播においてまさつて
 形、宮城等において
 種にやや劣るようで
 らの成績から、東北
 の平坦地の比較的肥
 適し、とくに白臍、
 て奨励できるもの
 る。

第4図 試作成績(2)
(岩手県)



関東地方においては、試作地のほとんどで対照品種に比較して多収を示し北関東地方平坦部の農林2号、農林3号、借金なし、花嫁等の栽培されている中生品種地帯にもつとも好適すると思われる。なお、南関東地方の、生娘、刈羽滝谷等の早生品種地帯においても、害虫防除を実施すれば多収穫用品種として栽培可能であり、千葉県茂原市における現地試験において、アール当り43kgにおよぶ多収の実例もある。(第10表参照)しかし、品質については、成熟期頃の気象条件によつては粒の悪変が生じやすく、また莢内害虫の被害も割合に多いので東北地方より安定性は劣るようである。

北陸地方においては富山県で、早生種として、陸羽4号にかわつて奨励品種に採用された。早生品種の栽培地帯は平坦地の一部にかぎられ、ほとんど畦畔大豆として栽培されている。その他の県では、試験年数が少ないが新潟県において中生種の、あぜみのり、より多収を示し富山の成績とともに一応北陸地方の早、中生品種として適するものと考えられる。

東山地方では熟期の点から見込がないようである。

X 摘要

関東地方中間部平坦地帯むきとして、多収、良質な品種の育成を目標に、昭和15年、茨城県農業試験場石岡試験地において、花嫁茨城1号を母とし、鼠莢を父として人工交配を行ない、その後育成をつづけ、昭和22年大豆関東10号の地方番号を付し、地方的適否を検討するため富山県に配布された。その後、富山県農業試験場で保存されていたが、後にこれが大豆関東10号とやや異なるところが明らかとされ、昭和30年、ふたたび石岡試験地にとりよせ選抜固定をはかり、昭和32年、あらたに大豆関東26号として地方的適否を検討し、昭和33年、フクメジロと命名された。なお、富山、岩手の両県で奨励品種に採用されている。

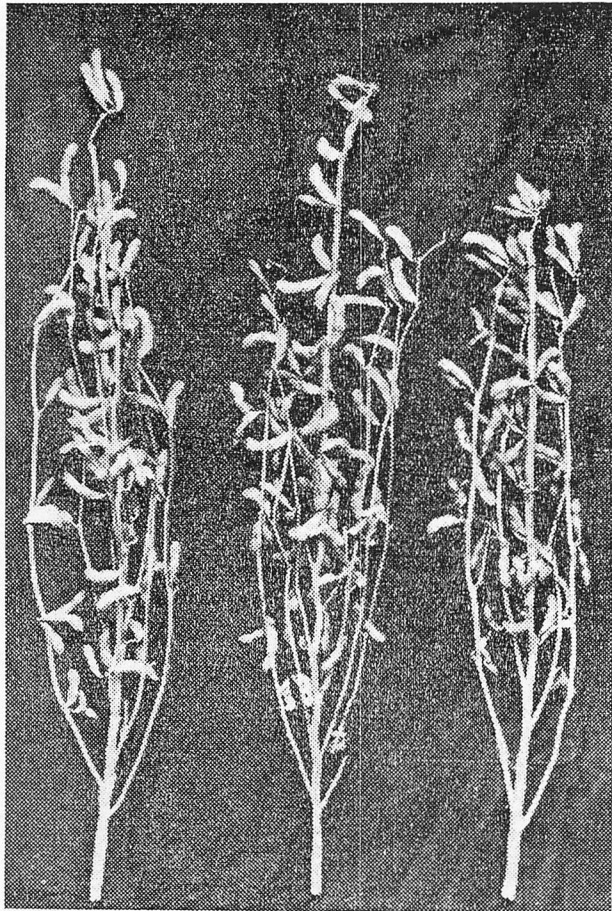
1. 熟期は、シンメジロより3~4日早い中生種にして、生育は旺盛で、多枝、多莢性である。植物体には白色の毛茸を密生し、莢は暗褐色で、いづれの形質も、シンメジロとよく類似している。

2. 紫斑病耐病性は中位で、株枯病には弱い、黒痘病には抵抗性であり、銹病に対しても強い方である。なお、シンクイ虫類耐虫性はあまり強い方ではない。

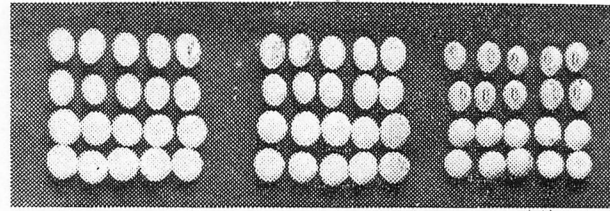
3. 収量は、シンメジロに劣らず多収性であるが、多肥適応性はやや劣るようである。

4. 品質は、外觀上は白臍、黄白色、中大粒で良好であり、とくに東北地方においてはきわめて美麗で商品的価値が高い。ただし、関東地方においては、成熟期に雨量が多いと品質が悪化しやすくまた蛋白質含量はあまり高くない。

5. 東北地方中南部のわりあい肥沃な平坦地帯、および関東地方中部の中帯生品種地に好適し、関東地方南部の早生地帯においても害虫防除を完全に実施すれば、多収穫栽培用品種として有望である。なお、北陸地方の早中生種としても適するものと考えられる。



シンメジロ (比較) フクメジロ 農林2号 (比較)



シンメジロ (比較) フクメジロ 農林2号 (比較)

On the Breeding of "FUKUMEJIRO" a Soybean Variety

Tetsuji YAMAKI, Tomeo FURUMAYA, and Takao ISHITSUKA

Summary

The above mentioned variety was produced in 1959 at the ISHIOKA Farm Experiment Station, IBARAKI-KEN by crossing "HANAYOME IBARAKI No.1" with "NEZUMISAYA".

The variety matures in 114 days falling under the ecological type II b. It bears abundant foliage and pods, yields plenty of the medium sized seeds. The variety is liable to lodge and considered unsuitable for intensive fertilization and close planting. The plant body bears whitish hairs and its hilum light yellowish and slightly elliptical, susceptible to purple speck and basal stem rot but, resistant to Sphacetoma scab.

The protein content of its seeds is comparatively low, however, its hilum color being light yellowish, this variety is considered suitable for white "Miso" making.